

「共感と信頼」をテーマに 自転車先進都市・横浜を目指す



林
文
子

横浜市長

森
井
博

『自転車・バイク・自動車駐車場 パーキングプレス』誌 発行人

ゲスト 横浜市長

林 文子 (はやし ふみこ) 氏

【プロフィール】 東レなどを経て、1977年ホンダ販売店に入社。トップセールスとして活躍。その後、BMW東京(株)代表取締役社長、(株)ダイエー代表取締役会長兼CEO、日産自動車(株)執行役員などを歴任。2009年8月、横浜市長に就任。現在2期目。指定都市市長会会長、中央教育審議会委員等を務める。14年在日米国商会議所(ACCJ)「パーソン・オブ・ザ・イヤー」等受賞歴多数。

平成23年度から日本最大規模のコミュニティサイクル社会実験としてスタートし、本格導入に至った「baybike」に加えて、「チョイモビ」「smaco」などのカーシェアリングも実施。常に他に先駆けて新たな公共交通を導入し続けている横浜市は、パーキング業界にとって目が離せない自治体だ。今回ゲストにお迎えしたのは、陣頭指揮を執る林文子横浜市長。進化を続ける「baybike」や自転車通行空間整備など、最新の取組を伺った。(対談収録2016年3月14日)

民間企業でも 行政でも 人がすべての要になる

森井 林市長は、横浜市長になられる前は、自動車業界に長くいらっしゃったそうですね。

林 はい。高校を卒業してすぐに、当時の花形企業だった大手繊維メーカーに就職したのですが、男女雇用機会均等法が施行されるより20年前だった当時は、男性と女性の仕事に線が引かれていて、女性には、男性の補助的な仕事しか与えられませんでした。「男性と同じように責任ある仕事がしたい」と転職を繰り返し、31歳の時にようやく出会ったのが、自動車販売の仕事でした。

森井 当時はまだ自動車販売の業界でも、女性は非常に珍しかったのではない

でしょうか。

林 はい。でも、おかげさまで、女性ならではの共感力や受容力をいかした「おもてなしのセールス」で、結果として、トップセールスになることができました。営業成績最下位の支店の支店長を任された時には、成績の振るわない営業マンたちに寄り添い、褒めて力を引き出すことで、支店の成績がトップになりました。その後、ファーレン東京(現フォルクスワーゲンジャパン販売)や、BMW東京、ダイエー、日産自動車と、4つの企業の経営者となり、現在は、市長になりましたが、民間企業でも行政でも「人がすべて」という経営の要は変わりません。リテール業界で培ってきた「共感と信頼」を、市長になってからも方針として掲げました。福祉サービスからまちづくりまで行政が取り組む範囲は本当に幅広いものですが、こうした姿勢はそのすべてに必要なことです。

森井 自転車や道路関連など交通行政についても同様の方針で臨まれているのですね。

林 まちづくりや交通施策も、そこに生活している人がいる、お使いになる人がいる、ということを念頭に、関係者の皆様と丁寧に議論を積み重ねることが大切です。行政の仕事には、時間はかかりますが、将来を見据えて事業を動かす醍醐味があります。森井様には、駅前駐輪場

を数多く管理していただいています。横浜市の大きな課題である放置自転車対策にご協力いただき、感謝しています。

2年前の本格導入後 進化を遂げた 「baybike」

森井 まずお伺いしたいのが、横浜市の交通施策の中でも、現在、横浜の都心部で展開しているコミュニティサイクル「baybike」です。こちらは3年間という長期の社会実験を経て本格導入し、導入後も好評ということですが、全国的に見ても横浜は進んでいる印象です。改めて事業の経緯をお聞かせください。

林 横浜市では、都心部を自由に楽しく巡る移動手段として、「baybike」がすっかり定着しています。当初は、公民が連携した日本最大規模の社会実験として、平成23年度にスタートしました。25年度までの3年間で、自転車台数は100台から300台に、サイクルポートの数も14か所から34か所に規模を拡大し、会員数は約19,000人にまで増えました。何より、1日当たりの利用回数が、初年度の約110回から約380回と3倍以上に増加し、横浜観光はもちろん、仕事での移動やちょっとした買い物の足として、利用の幅が大きく広がりました。

森井 社会実験として、大変な成果を収



①横浜市民や地元のビジネスパーソン、横浜を訪れる観光客など多くの人の快適な移動手段として定着しているbaybike
②自転車の入出庫、精算などはすべて自転車本体に搭載されたリーダーで行う仕組み(いずれも横浜市提供。次ページ以降、林市長、森井発行人の写真以外の画像もすべて横浜市提供)

めたようですね。

林 「baybike」をご利用いただいた皆様から、「自家用車から自転車利用に切り替えた」「都心部の滞在時間が増えた」「回遊性が向上した」などの声をいただき、具体的な成果につながっていることがわかりました。横浜市としても、こうした社会実験を通じ、低炭素化に向けた取組に加え、都心部の活性化や観光振興にも非常に効果があることが分かったので、平成26年4月から本格導入に移行しました。

森井 本格導入後の状況はいかがでしょうか。

林 さらに事業規模の拡大と利用者の増加を目指していきまして、平成27年3月からは、すべての自転車を電動アシスト機能付の自転車にリニューアルし、新サービスの提供を開始しています。これまでは、専用カウンターまでお越しいただく必要があった利用登録の手続きが、パソコンや携帯電話から24時間いつでも行え、観光客の方にも気軽に利用いただけるようになりました。電動アシスト付の自転車になったことで、坂道や、長距離の移動も快適になったとご好評いただいています。また、自転車本体にGPSや自動ロック機能などを搭載したことで、これまでよりも小さなスペースでサイクルポートが設置できるようになりました。既に、みなとみらい21地区や桜木町駅周辺、山下公園など、特にご利用の方が多いエリアに、サイクルポートの新設・増設を進めています。今後は、山手地区や関外地区にもエリアを拡大していく予定です。

森井 現状のサービスレベルにとどまることなく、様々な改善をなさっていることは素晴らしいですね。

林 「baybike」は、横浜市と㈱ドコモ・バイクシェア様が協働して進めている事業ですが、この他にも多くのご企業からサイクルポート用地の提供をはじめ、様々なご協力をいただいています。昨年



みなとみらいエリア、赤レンガ倉庫前など多くの観光スポットになじむbaybikeのスマートなフォルム。ポートのデザインも洗練されている



7月からは、㈱ローソン様のご協力で、登録手続き・超過料金不要で30分以内なら1日何度でもご利用いただける「30分繰返し使えるパス(30くりパス)」を販売しています。

森井 30分単位で何度でも使えるパスというのは、利用者目線を活かした利便性の高い仕組みですね。

林 ありがとうございます。横浜都心部のローソン各店舗を含め18か所で販売しており、横浜を1日ゆっくり巡って観光したいという方などのご利用が増えています。また、岩崎学園横浜デジタルアーツ専門学校の学生の皆様には、「baybike」のポスターや広告動画を制作していただき、横浜駅をはじめエリア内でのPRに活用させていただいています。

森井 既に「baybike」は、横浜という街全体に受け入れられているのですね。

林 本格実施後、おかげさまで今では会員数も37,000人を超え、1日あたりの利用件数も約440回と増え続けています。これからの季節は、自転車での横浜観光には最適です。みなとみらい21地区のサイクルポートで「baybike」を借りて、横浜赤レンガ倉庫、象の鼻パーク、山下公園と海岸沿いを抜け、元町・中華街を巡って、山手の丘まで走ってみるのも、とても気持ちがいいと思いますよ。是非「baybike」で、横浜の街をお楽しみいただきたいと思います。

さらなる利便性向上を目指して 他都市との連携も検討

森井 これだけの成功を収めている理由について、市長はどうお考えですか。

林 現在、事業を実施している横浜都心部は、港を囲む素晴らしい街並みの中に魅力的な観光スポットが広がると同時に、多くの企業が集積するオフィス街でもあります。「baybike」の利用状況を見ると、平日は通勤や仕事で駅と周辺エリア内を短距離に移動する方が多い一方で、休日は港周辺の観光スポットを巡る長距離の移動手段としてご利用いただいています。平日は仕事に、休日は横浜観光にと、それぞれの目的にあわせて多くの方にご利用いただいているのが大きな特徴です。またこのエリアには、みなとみらい線、市営地下鉄、JRといった鉄道各社と、複数のバス路線が走っています。こうした公共交通と「baybike」を上手に組み合わせてご利用いただくことで横浜の街の楽しみ方がさらに増えています。

森井 オフィス街と観光地、横浜のこうしたエリアの特性というのも大きいのですね。また、公共交通と組み合わせることによって利用の幅が広がっていることも重要ですね。

林 日本では現在約70の都市でコミュ

ニティサイクルが導入されていますが、日本国内でのコミュニティサイクルの歴史はまだ浅いです。そのため、事業手法も模索している状況で、各都市ごとに多岐にわたっています。世界を見ると、例えばロンドンやパリなどの大都市では、何千台という規模で実施されていて、日本国内でもまだまだ事業規模を拡大していく余地が十分に残っていると思っています。自転車をシェアすることで環境にも良いということ、さらには都市での暮らし方、楽しみ方の幅が広がることをしっかりPRしていきたいと思います。東京では2020年オリンピック・パラリンピックを見据えて、江東区、千代田区、港区、中央区の4区で、それぞれの区で貸し出したコミュニティサイクルをどの区でも返却できるような連携が進んでいます。横浜市でも、今後、東京都区部をはじめ他都市との連携を図り、市民の皆様がさらにご利用しやすい事業にしていきたいと考えています。

森井 順調な滑り出しを見せているようですが、事業の継続という点で課題がありましたら教えていただけますか。

林 今後の事業の継続に向けて、コストの削減はもちろんのこと、利便性を向上させ、いかに利用者を増やしていくかが重要です。事業規模を拡大し、利用しやすさを向上させていくためにも、駅や集

客施設の近くなど、さらに便利でわかりやすい場所へのサイクルポートの設置を進めていきます。あわせて自転車の車体広告の活用など、利用料以外の収入の確保にも努めていきます。

森井 自転車通行空間の環境整備についてはいかがでしょう。

林 自転車で気持ち良く横浜の街を移動していただけるよう、エリア内の通行空間もしっかり整備していく必要があります。みなとみらいエリアなど一部のエリアでは自転車専用レーンを設置するなど、自転車が通行しやすいように整備を進めています。今後、他のエリアでも、利用促進と並行して通行空間の整備を進めていきます。その他には、特に近年増加している外国人観光客の皆様にも「baybike」をご利用いただき、横浜の魅力を満喫していただきたいと考えています。既に英語のホームページをご用意していますが、今後より多くの言語に対応していきます。

森井 多言語対応は国際都市である横浜らしい対応ですね。

林 引き続き、鉄道やバスなどの公共交通機関とスムーズに乗り換えができるよう、また、地域の皆様にもご協力いただきながら「baybike」を利用した横浜の街の多彩な楽しみ方をご提案できるよう、横浜の街全体で盛り上げていきたいと



みなとみらいエリアに整備されている自転車専用レーン

思っています。コミュニティサイクルには、環境、観光、健康などに貢献する新たな交通手段としての大きな可能性がありますので、一人でも多くの方に利用していただけるよう取り組んでいきます。

4つのテーマを柱に「自転車総合計画」を策定

森井 先ほどの「baybike」のお話の中で、自転車通行空間の整備の必要性や外国人観光客の利用者増に向けた取組についてお話がありました。一方で、平成27年6月の道路交通法の一部改正で自転車利用者の利用マナーの徹底が求められています。そのような中で、横浜市は現在、「自転車総合計画」を策定中であると伺いました。その狙いと概要についてお聞かせいただけますか。

林 最近、環境や健康への関心が高まり、自転車の利用が見直され、通勤・通学や買い物、レジャーなど、日々の暮らしの中で、自転車を利用する方が増えています。お子さんから高齢者まで幅広く利用できる便利な乗り物である一方で、自転車に乗る際のルールやマナーが十分に浸透しておらず、自転車による事故も多く発生しています。

森井 そうした背景を受けて「自転車総合計画」の策定を進めているというわけですね。

林 はい。皆様が正しく快適に自転車を利用できる街を目指して、今後10年間の取組をまとめた総合計画の策定を進



世代を問わない利用のしやすさ、環境や健康への効果など、自転車を持つ可能性や今後の展望などをお話いただいた（横浜市庁舎の市長応接室にて撮影）



めています。ルールをわかりやすく示し、守れる仕組みをつくる「まもる」、自転車通行空間を整備する「はしる」、駐輪環境を整える「とめる」、自転車の新しい可能性を広げ、活用できる環境を整える「いかす」の4つのテーマごとに施策をまとめています。28年度のなるべく早い時期に計画を確定し、自転車施策を総合的に進めていきます。

森井 4つのテーマに沿ってシンプルにまとめていらっしゃいますね。それぞれのテーマの中でもマナーという点では、「自転車総合計画」のテーマの「まもる」というところが大切かと思いますが。

林 自転車は道路交通法上の「軽車両」として、様々な交通ルールが定められています。自動車のように運転するのに試験や免許が必要なわけではありません。ルールを知らないままに自転車に乗っている方もいらっしゃるのが現実です。そこで、横浜市では、市内での自転車利用の規範を策定し、ルールを学ぶ場づくりとルールを教えることができる人材の育成を進めていきたいと考えています。「みんなが快適に過ごせるまち」を実現するためには、自転車に乗る人に対しても、乗らない人に対しても、“自転車の利用ルールを知らない”“知っていても守らない”という状況を減らしていかなければ

なりません。まず、自転車での交通ルールをしっかりとご理解いただき「意識改革」を促そうというのが「まもる」の考え方です。

森井 昨年6月の道交法改正以降、全国的に自転車免許制の是非が話題になっているだけに、横浜市のそうした取組は注目に値します。「意識改革」の内容を詳しく教えていただけますか。

林 道路交通法などの基本的なルールに加えて、間違いやすいものや判断に迷うものを具体的に示し、ルール違反によって周りにどのような迷惑が及ぶかなど、ルールの必要性を納得できるような内容にしていきます。そして、周囲に配慮した自転車の使い方やマナーについても、まとめていければと考えています。さらには、取りまとめたルールを実践できるような環境整備も進めていきます。

森井 なるほど。自分がルール違反をすると周りにどんな迷惑が及ぶかで踏み込んでいるのは具体的であり、効果が

期待できそうです。計画のテーマにはほかに「はしる」、「とめる」というハード面に関しての内容もありますが、そこで触れている「自転車通行空間整備」について、その考え方や今後の展開などをお聞かせいただけますか。

林 自転車通行空間の整備については、これまで主に市内の主要拠点を結ぶ広域的な整備を進めてきました。今後は、「自転車総合計画」に基づいて、鉄道駅周辺など自転車の集中する地域や事故の多い地域に重点を置いた面的な整備に取り組んでいきたいと考えています。

森井 「面的な整備」とはどのような内容ですか。

林 鉄道駅周辺などにおいては、自転車が行歩者に接触する事故など、危険な状況が多く発生していることから「重点エリア」と位置づけて対策に取り組みます。具体的には、自転車の車道左側通行が守られるよう、自転車レーンの整備や自動車通行位置の明示など、それぞれの道路



- ①平成26年8月、相模鉄道瀬谷駅北口駅前広場で設置された民設民営の駐輪場。道路区域である駅前広場では初の設置となった
- ②車道左端に矢羽型の路面標示を設置するなど各地域の道路事情に合わせて自転車通行空間の整備を実施している
- ③「横浜市自転車総合計画（素案）」の概要版表紙

事情に応じた整備を進められるよう、エリアごとに実行計画を策定していきます。地域の皆様をはじめ、各道路管理者や交通管理者の皆様とも十分に連携し、自転車利用の実態や事故の発生状況なども踏まえながら、歩行者や自転車、自動車のそれぞれが安全に通行できるように取り組んでいきます。

森井 道路管理者、交通管理者だけでなく、日常的に自転車を利用されている地域の方々にも協力していただければ、より効果的な整備になりそうです。続いて、「とめる」という視点での駐輪スペースを確保することも大切かと思います。駐輪対策についてお聞かせください。

林 横浜市ではこれまで、駅前を中心に収容台数約10万台の駐輪場整備等の対策を行った結果、放置自転車台数は大幅に減少しています。一方で、一部の地域では、買い物利用による放置自転車が依然として課題となっています。こうした状況への対策として、例えば瀬谷駅北口駅前広場では、平成26年8月に民設民営の駐輪場を道路区域である駅前広場に初

めて設置した結果、買い物利用による放置自転車が大幅に減少し、駅を利用される方の通行がスムーズになりました。横浜市では放置自転車が特に多い駅を優先対応駅と位置づけ、民間事業者の皆様との連携や民営駐輪場への補助制度の拡充など、それぞれの状況に応じた対策を重点的に進めていきます。

森井 ここまで自転車施策についてさまざまな施策をお伺いしてきました。最後にそれらの取組を通して、今後の横浜市がめざす、駅周辺の街づくり、道づくりの姿についてお聞かせください。

林 「はしる」「とめる」のハード整備は、特に駅前など自転車利用の多い地域では、各地域の特性を踏まえながら、街づくりと連動して進めていく必要があります。生産年齢人口の減少や少子高齢化の進展が予測される中、多くの人や企業を呼び込み、誰もが住みたい、住み続けたいと思える街づくりを進めていくことが重要です。自転車総合計画で掲げている様々な施策の展開はもちろん、まちのバリアフリー化や無電柱化の推進、バス等の利



便性の向上など、あらゆる施策や事業を一体的に組み合わせることで、駅周辺の利便性や魅力の向上に積極的に取り組んでいきます。

森井 多分野における施策によって、横浜市がさらに洗練された自転車先進都市になることに期待したいと思います。本日はお忙しいところ、誠にありがとうございました。

PP

【パーキングプレス 発行人】森井 博のプロフィール

- 一般社団法人 日本パーキングビジネス協会 理事長
- 一般社団法人 自転車駐輪場工業会 会長
- 一般社団法人 日本シェアサイクル協会 専務理事
- 東京八重洲ライオンズクラブ 会員
- 六本木男性合唱団 団員
- サイカパーキング(株)、日本駐車場救急サービス(株)、モリスコーポレーション(株) 夫々代表取締役CEO

【略歴】 1938年(昭和13年) 宮崎県延岡市生れ77才。
1957年(昭和32年) 石川県立金沢泉ヶ丘高校卒
1961年(昭和36年) 東京商船大学(現東京海洋大学)卒
1961～1979年 石川島播磨重工業(現：IHI)
1979～1991年 東芝
1991年～現職

【趣味】 ゴルフ・ドライブ・歌・テニス・野球・水泳

【遍歴】 水泳(漁港で漁師の子供達と一緒に育ったため、小学生になる前から泳ぎが得意、野球(中学生までは本気でプロ野球選手になるつもりであった。元西鉄ライオンズ 故・鉄腕 稲尾和久投手、完全試合男 田中勉投手、元巨人 淡河弘捕手は友人。原辰徳前監督の父 故・貢氏からはボクサー犬を貰った仲。少年野球コーチ6年間)、陸上競技(短距離、やり投げ、インターハイ2回出場、オリンピック3回出場の東京陸協 大串元会長とは友人)、テニス(元デ杯選手 本井満氏のコーチでかなりの腕前になるも、45歳時アキレス腱断裂で引退)、ゴルフ(熱心に勉強するも、なかなかシングルになれない。これをヘタの横好きという)車好きで、国産車、外国車数台所有。自転車は年齢を考え乗り乗らないが、数台所有。健康のため、事務所にフィットネスマシン5台を置き、毎週数回トレーニングは欠かさない。

過去の対談ゲストの方は、WEBでご紹介しています

パーキングプレス 対談 で検索

または <http://www.parkingpress.jp/taidan/> にアクセス

対談記事のバックナンバーもご覧いただけます。

